

神農と湯島聖堂神農刻像

神農は、古代中国の伝説上の帝王である三皇（伏羲・神農・女媧）の一人である。中国古典籍によると、初めて農具（鋤・鍬）を作り農耕を人民に教えたという。また、人民が病気で苦しんでいるのをみて、百草を嘗めて医薬を作り、さらに、農作物など他の物品を交換する市場を設け、交易を教えたという。日本では、江戸時代から医薬の始祖として神農は東洋医学者の尊崇を集めてきたが、交易の神としての神農も商業に携わる人々の間で根強い人気を博し、商業神として現在も各地で祀られている。

さて、湯島聖堂神農像は、下記沿革にあるように、昭和五十九年の調査によって、三代將軍家光の発願により製作されたものとするのが有力となっている。当初、雑司ヶ谷の東光院薬園寺に祀られたが、元禄十一年（一六九八）聖堂敷地東北の地に位置して神農廟が設けられ、神農像もここに安置された。その後、寛政九年（一七九七）神田の医学館（躰壽館）に移り、さらに有為転変を経て昭和十八年（一九四三）実に百五十年ぶりに再び聖堂に遷座した。

この神農像（木彫）は、ほぼ等身大で、古木の切り株の上に座して右足は曲げ、左足は下に垂れている。目は見開き、唇は僅かに開き草を嘗めているようである。また、右手は膝の上に置いて赭鞭（しゃべん・赤い鞭のようなもの）を持ち、左手は胸元で曲げて薬草のようなものを握っている。眼光炯々、身体には薬草の枝葉のような衣服が刻まれていて、太古の帝王、医薬の始祖に相応しい威風凛々とした趣である。

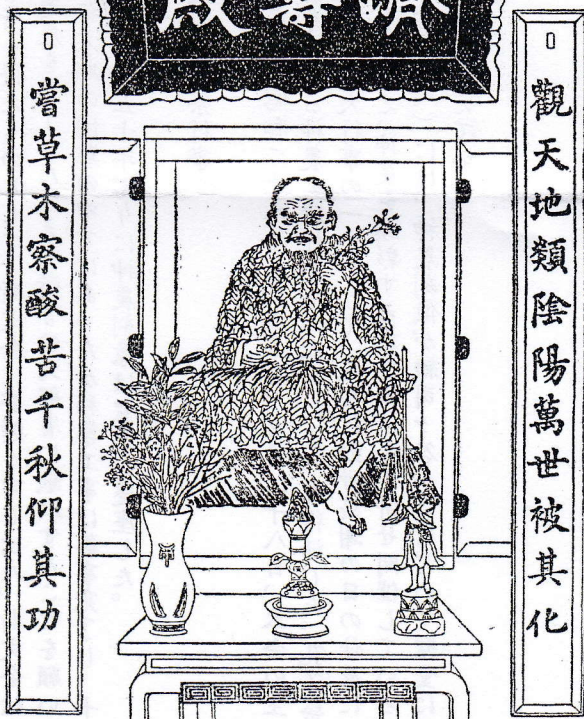
※赭鞭……しゃべん。赤いむち。むかし、神農が赤い鞭で草を鞭打ちながら薬草をさがしたことから、本草学者を赭鞭家という。（搜神記より）



神農廟



神農像



觀天地類陰陽萬世被其化

嘗草木察酸苦千秋仰其功

狩野永秀模写

湯島聖堂神農像

神農の始祖炎帝神農は約五千年前の支那太古三皇の一人で、交易の神として神農も商業に携わる人々の間で根強い人気を博し、商業神として現在も各地で祀られている。この神農像は、江戸時代から医薬の始祖として神農は東洋医学者の尊崇を集めてきたが、交易の神としての神農も商業に携わる人々の間で根強い人気を博し、商業神として現在も各地で祀られている。